

ヘーゲル市民社会論における労働思想とマルクスの感性労働論

北海道大学経済学研究科 博士課程 尤歆惟 (ユウシンイ)

本報告の目的は、ヘーゲル市民社会論における労働観とマルクスの感性労働観を検討し、これによって二人の資本主義社会に対する理解の原点を比較し、マルクスのヘーゲルへの転倒の理論的意味を再検討することである。

本報告の内容は、おおよそ二つの部分に分ける。一つは、ヘーゲル市民社会論における労働思想に対する検討であり、もう一つはマルクスの感性労働論に対する検討である。ヘーゲル理論の部分は、主にヘーゲルの『法の哲学』の市民社会論に絞り、マルクスに関してはまず『1844年経済学・哲学手稿』における労働観を代表とするいわゆる感性労働論を検討し、そして『資本論』の労働過程論における労働観に感性労働論が残存することを指摘しながらそれを検討する。

1. ヘーゲル市民社会論における労働思想について

ヘーゲルによると、市民社会は国家や家族と違って、普遍性と直接に統一しない倫理形態であり、市民社会において普遍性は「特殊なものの中にただ映現するもの」 (§ 181) である。つまり、市民社会は、倫理態の分裂態として、個々人の特殊な行動を通して普遍性を間接的に表現する形態です。このような特殊性を通じて反映される普遍性を、ヘーゲルはまず「普遍性の形式」と呼ぶ。この「普遍性の形式」は、個々人の特殊な利己的目的を通じて間接的に表現され、「経済法則」として理解されていていいと考えられている。「普遍性の形式」を把握する理論は、国民経済学である。

ヘーゲルにおける市民社会は、まず「欲求の体系」として現われる。「欲求の体系」とは、「個々人の労働によって、また他のすべての人々の労働と欲求の満足とによって、欲求を媒介し、個々人を満足させること」であり、言い換えれば人々が互いに欲求と労働とを媒介にして成立する、いわゆる「全面的依存性の体系」である。このような依存性の関係に、欲求と労働が多様化することになり、ヘーゲルはまさに欲求と労働の多様化を通して、市民社会の普遍性を検討する。

まず、欲求の多様化が欲求の普遍性をもたらす。一方では、欲求の多様化が、人間の自然状態の脱出を意味し、人間は欲求を間接化して、「趣味と効用」によって欲求を選択することができることになる。他方では、欲求の多様化はもっと抽象的な欲求をもたらすことができる。というのは、欲求の多様化は、それを満足するための手段の部分化と多様化をもたらす、その部分化と多様化された手段も新しい欲求、つまり手段に対する欲求をもたらすことになるからである。この手段に対する欲求は、いわゆる「相対的目的や抽象的欲求」になる。そして、抽象化された欲求は、市民社会という「全面的依存性の体系」の特徴として、市民社会にある人々の相互関係を規定することになり、結局人間の普遍性を育てることになる。市民社会における人間の行動は、実際はただある特定の欲求を満たすのではなく、万人の欲求を抽象的あるいは相対的欲求として満たさなければならない。かくして、人間は互いにこのような関係によって孤立的な人間でなく、普遍的な社会人になる

のである。

次に、市民社会における労働も抽象化、さらに普遍化する。欲求の抽象化に応じて、労働も抽象化し、労働の抽象化は分業をもたらすことによって、労働の技能と生産量を増大することができる、人間の依存関係と相互関係を完成することになるのである。

さらに、ヘーゲルの有名な労働教養説を提出する。ヘーゲルは市民社会論に二種類の教養、すなわち理論的教養と実践的教養とを提唱し、そのうちに実践的教養はまさに労働によって実現されると思っている。ヘーゲルによると、労働によって、人々は「仕事一般」の習慣を、さらに「材料の本性」と「他人の恣意」に適応する習慣を、最後に「客観的活動とどこでも通用する技能と」の習慣を、身につけることになる。したがってヘーゲルが提唱する教養ある労働は、単なる人間対自然の対象化活動ではなく、むしろ社会に適応できる、市場で評価できる有用労働である。

ヘーゲル労働像の特徴の一つ目は、「欲求の体系」という論理的優位性に基づいて労働を特徴づけて、労働を普遍的側面を賦与することである。二番目は、労働論を労働教養説と接合しようとすることである。特にヘーゲルによると、人間は教養形成としての労働過程を通じて、社会という普遍性への信頼、および社会人としての「自主独立」への誇りを身につけることとなる。それゆえ国家による貧民に対する保障は、公的行為ばかりではなく、むしろすでに市民社会に潜んでいる公共性への破壊とでもいうべきである。ここでヘーゲルの労働教養論の保守性が窺える。

ヘーゲル労働理論の問題点はおおむね以下の二つである。まず、労働の抽象化と普遍化との関係が解決されるとは言えない。というのは、一方では、ヘーゲルは分業の下で労働がいかに抽象化によって生産力を増進するかを明確に意識して、『法の哲学』の市民社会論にその労働抽象化を普遍性という積極的な意味を賦与しながらも、他方では、ヘーゲルは労働の抽象化、特に機械労働をもたらす抽象的労働はいかに労働者を鈍化するかをきちんと意識し、結局ヘーゲルは後者の意識を『法の哲学』に抹殺し、現実を無批判的に自分の理想労働像すなわち労働の普遍化と接合しようとするからである。問題点の二番目は、ヘーゲルは欲求の優位性を強調するにもかかわらず、市民社会の普遍的な欲求関係から流通理論まで展開しなかったことである。

2. マルクスの感性労働論について

マルクスの感性労働論は、ヘーゲル哲学に対する転倒によって出来たものである。マルクスは唯物論に基づいて、ヘーゲルの観念論を転倒する。しかしそれは単なる哲学的な転倒でもなければ、ただヘーゲルの国家優位性を市民社会優位性に転換するものではない。むしろそれはマルクスの言ったように、国家の諸形態と法の諸関係を「それ自体」から、あるいは「人間精神のいわゆる普遍的発展」から捉えることを拒否し、「物質的生活の諸関係・諸事情」に根ざして探究し始めるという方法論的な転倒であり、言い換えれば人間精神の普遍的発展に基づく哲学に対する人間の物質的な生活関係を土台にする経済学への転倒というべきである。ヘーゲルは精神そのものに立脚し、市民社会を普遍性は特殊なものの中に反映するものとして扱い、したがって労働にある普遍的側面を強調し、その普遍的側面を市民社会という「欲求の体系」あるいは「全面的依存性の体系」に尋ねる。これに反して、マルクスはフォイエールバッハの方法を引き継ぎ、有限性に立脚して、無限性を有限的人間の疎外態、いわば公共性の幻想として扱う。したがって、マルクスは精神の普遍性から労働を理解しないで、むしろ人間対自然という感性的な意味で労働を理解しよ

うとする。この感性労働論は、マルクスの『1844年経済学・哲学手稿』に、特にその第三手稿に表現される。

『経哲手稿』第一手稿において、マルクスは私的所有と疎外労働という事実を念頭に置いて、もっと根本的な視角、すなわち労働という人間にとっての原初的主体性に基づいて、私的所有と疎外労働との事実を解釈しようとする。しかし、労働者対自然というもっとも根本的な関係から、直接に労働者は生産手段と生活手段を失われるという資本主義の現状を導き出すという推論は、成功しなかった。

『経哲手稿』第三手稿において、マルクスはさらに二層の感性的労働観を主張し、人間の感性的な労働に基づいて、人間社会の諸形態を、さらに人間の歴史を把握しようとする。第一層の感性的労働観において、マルクスは人間が労働を通じて対象を措定するのではなく、むしろ「対象的活動」を通じて外的自然界を作用すると同時に、その対象から自分の対象的活動を確認する、と指摘する。第二層の感性的労働観において、マルクスは、人間の対象的活動としての労働は単に人間対自然関係にとどまらず、「宗教」そのほかの上部構造として表現されるわけである、と指摘し、またヘーゲルを批判する際に、ヘーゲルは「抽象的であるが——労働を人間の自己産出行為としてとらえ」ることを称賛するとともに、ヘーゲルは自然物としての人間を「抽象的思惟的な存在」に入れ替えるため、結局ヘーゲルにおいて、「外化の止揚が外化の確認」となり、本当の感性自然物としての人間の確認とはなくなることを指摘する。マルクスによると、感性的自然物としての人間は、その対象的活動あるいは労働を通じて、宗教などの疎外態を創出すると同時に、自分がその疎外態にとどまって、すでに自分に帰ることができなくなるのではなく、むしろその疎外態を通じて自分の感性的な「本質諸力」を確認するができ、したがってこのような感性的な「本質諸力」に戻るべきである。

マルクスの感性労働論には、ヘーゲルに対する唯物論的な転倒という功績がある。しかし、このような感性労働観には問題がないわけではない。要するに、直ちに労働から資本主義社会を把握しようとする、資本主義の形態規定を理解できなくなることとなる。

また、『資本論』の労働過程論においても、感性的労働観の仕組みが残るから、生産の資本主義性を捨象するとともに、生産労働における抽象的労働の一面も捨象することとなる。マルクスは労働過程論で労働過程の三つの要素、すなわち労働そのもの、労働対象と労働手段を論じ、そして特に、労働対象と労働手段はすでに労働によって加工されたものである場合が多い、と指摘する。さらに、マルクスは、この労働の全過程を「その結果である生産物の立場から見れば、二つのもの、労働手段と労働対象とは生産手段として現われ、労働そのものは生産的労働として現われる」と総括する。しかしそうすると、生産労働は前で明らかにされた物質代謝説と衝突することとなる。ここにおいて労働が抽象労働の性質を持つこととなり、補助材料（例えば照明や採暖）など直ちに自然対象に素材の変化をもたらさない要素も含まれ、補助材料を生産する労働も生産労働の一部とみなさなければならぬ。言い換えれば、ある特殊な労働過程そのものは、人間対自然関係にはならず、むしろ人間労働の総体の一環として、あるいは人間と人間との関係として、現れるのである。つまり、マルクスがすでに「生産物の立場」から生産労働における抽象労働に触れたにもかかわらず、人間対自然の物質代謝という感性論的労働観にこだわるため、生産労働にすでに含まれた抽象労働という規定を無視して、労働過程を単なる有用労働として論じ、結局彼の労働過程論に不明瞭さをもたらすことになる。

かくして、『資本論』の労働過程論において、労働過程はただ有用生産物を生産する過程

として扱われ、資本家と単なる包摂される関係になる。例えばマルクスは、「使用価値または財貨の生産は、それが資本家のために資本家の監督のもとで行われることによって、その一般的な性質を変えるものではない」と、労働過程の一般的性質を述べる。しかしそうならば、生産労働は超社会形態的性格を持つこととなり、資本主義にしる、中世封建社会や奴隷社会にしる、どのような社会形態でも生産労働に対して単なる外的関係を持つこととなる。それでは近代社会としての資本主義は歴史の一社会として他の諸社会と違って、いわゆる「人間の解剖」の対象になる意味が、見失われると言わざるを得ない。実は資本主義の独特性は、流通形態が生産過程を把握した後、抽象労働と具体労働という労働の二重性が価値と使用価値として顕在化させられ、労働過程は全面的な商品生産として現われる、ということにあると考えられる。したがって、資本主義社会の独特性が明らかにされるとともに、資本主義の人間社会に対する普遍的な意味も明らかにされるといってよい。

結論として、ヘーゲルに対する唯物論的転倒はマルクスの功績であるにもかかわらず、感性的な人間労働に基づく資本主義への理解は、経済学的には労働そのものという実体の意義を過大化し、流通形態という資本主義の源泉的な根拠と調和できなくなることをもたらすことになる。これに対して、ヘーゲルの政治経済学への観念論的受容は、労働に対する欲求の優位性を強調することになるから、このような問題が存在しないといえる。したがって、マルクスの感性労働論を、ヘーゲル市民社会論における普遍労働説とともに批判的再検討しながら、流通形態論から出発して、唯物論と資本主義への経済学解明との関係を再構築する必要がある。

参考文献

- 高柳良治『ヘーゲル社会理論の射程』御茶の水書房、2000年
山之内靖『受苦者のまなざし——初期マルクス再興』青土社、2004年
神山伸弘『ヘーゲル国家学』法政大学出版局、2016年
権左武志『ヘーゲルとその時代』岩波新書、2013年
山中隆次『初期マルクスの思想形成』新評論、1972年
清水正徳『自己疎外論から『資本論』へ』こぶし文庫、2005年
山口重克『価値論の射程』東京大学出版会、1987年
大澤健「初期マルクスにおける労働価値論の拒否について」和歌山大学『経済理論』377号
大澤健「初期マルクスにおける労働価値論の受容について」和歌山大学『経済理論』384号
Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Naturrecht und Staatswissenschaft im Grundrisse, Grundlinien der Philosophie des Rechts*, Berlin 1821. 『法の哲学』藤野渉・赤沢正敏訳、中央公論新社、2001年
『自然法と国家学講義：ハイデルベルク大学 1817・18年』高柳良治監訳、法政大学出版局、2007年
『法の哲学：『法の哲学』第四回講義録：1821/22年冬学期，ベルリン：キール手稿』尼寺義弘訳、晃洋書房、2009年
Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Gesammelte Werke*, Bd.6;8 (Felix Meiner) 『イェー

ナ体系構想：精神哲学草稿 I（1803-04 年）：精神哲学草稿 II（1805-06 年）』加藤尚武監
訳、法政大学出版局、1999 年

『キリスト教の本質』L. A. フォイエルバッハ著；船山信一訳、福村出版、1975 年

『マルクス パリ手稿——経済学・哲学・社会主義——』山中隆次編訳、御茶の水書房、
2005 年